

学習者の主体的屈折を経て、彼の思考システムに組み込まれたものなのです。こうした考え方に立ったとき、数列は「教えられるもの」にする努力の足りない内容の一つであり、「学力」の形成しにくいものであると指摘できると思います。

以上のような「科学の体系」「教育（教

科）内容」「教材」「教授行為」「学習者の問題」「学習者」の問題は、大学の授業においても考慮されねばならないものではないでしょうか。後期の「初等教育研究」で、こうした問題意識に立って、「『さぬきうどん』で授業をつくる」を構想しています。ご意見をお待ちしております。

## 「一般教育」の頃

松本 康

私が「一般教育」なるものに初めて触れたのは16年前のことである。「そんなに昔だったのか」と今さらながらに驚いてしまうが、それほど昔のようにも思えない。とにかく、1978年の春に、私は筑波大学に入学した。原野のあちこちに建設中の建物があり、発展途上の大学という感じに満ちていた。共通一次試験開始の前年である。

筑波では当時としては新しいカリキュラム上の試みがいろいろなされていた。私が入学した人間学類には教育学・心理学・心身障害学の三つの主専攻が置かれていて、3年次に主専攻に進むまでは、学類必修の共通科目と専門科目が一般教育科目の中に少しずつ混じり込んでくる形で、あまり「一般」と「専門」の区分を意識せずにすんだ。選択の幅はかなり広く、他学類の科目の履修も一定範囲で認められていた。学生の中にも「専門バカ」を嫌う雰囲気があって、なるべく関係ない分野の講義に出てゆくことが奨励されていた。必修の語学や体

育や国語（作文演習）の合間をぬって、できるだけスリリングな講義に取り組もうと努力していた覚えがある。

大学に入学したら乱読するのだと決めていたので、私は「一般教育」の授業をもらえば自分の読書の方向づけに使っていた。多くの講義に顔を出すという点ではマジメな学生だったが、あらかた講義の様子が分かると、エスケープして喫茶室で本を読んだり議論をしたりして過ごす、主体的怠学派の学生だった。やがて筑波だけでは飽き足らず、『ニセ学生のススメ』という本を頼りに東京まで出かけて、主要大学の名物教授の講義をのぞいたりしていた。試験を受けずに「ヤーマタ」と言って落とす科目が「一般教育」には多かったが、あまり惜しいとは思わなかった。単位と引換えにすることに抵抗を感じていたのかも知れない。自分の専攻とは一見関係のない、役に立ちそうにない分野に、今でも忘れられない講義が多かったのは不思議である。

哲学、宗教学、社会学、文学、歴史学など、人文系の科目を多く渡り歩いたのは、今から考えると、人間についての漠然とした興味と、自分の生き方についての糧を求める姿勢があったからなのだと思う。求めるものが何であり、自分が何になるとうしているのかは、当時ではつかみ切れなかった。その後、私は実験心理学を主専攻に選んだのだが、結局は生きた人間の出会う、教育の世界に興味があったことに気づいて、大

学院では教科教育学（社会科教育学）の世界に進むことになる。まさか大学の教師として「講義」する側に回るようになるうとは、大学入学当時は夢にも思わなかったのだが。

私にとって「一般教育」は、大きな「無駄の世界」だった。だがそれは、不可欠で楽しい無駄だった。あの「無駄の世界」がなければ、今の私はもっと貧しかったはずである。

## 一般教育としての「経済学」？

村 山 聡

「経済学」という講義科目を引き受けることは勇気のいることであった。経済学部の中で、それも専門課程において、特殊な一専門分野であるドイツ近世経済史を教えた経験しかない者にとって、それは未知の世界であった。

第一に、専門教育が1年生から行われる大学のカリキュラムの編成上、学生時代に「経済学経済学部の出身で」という講義を聞く機会が全くなかったことである。授業のモデルを知らない。経済の理論、政策、歴史とそれぞれの専門分野への入門的な講義しか、頭に浮かばない。経済学をさらに深める必要のない人々に一体何を提供すべきなのか。さらに、ドイツ留学時には、歴史学部にも所属していたものの、それら以外の学部経験がない。他学部の学生の一般的なニーズがいかなるものか、それを想像す

ることも難しい。

そして第二に、人々の生活する場所を重視する、社会史的・地域経済論として、経済現象と他の社会的現象との関連について、新たな分析可能性を探っている者としては、経済学の一般的な教科書をそのまま教えることにも抵抗があった。「経済学」という学問自体が、大きなパラダイムの転換を迫られていると考えるからである。だからといって、開発途上の自説を無闇に強要することもできない。まして、経済学についての一般的な知識を得たいと学生が望むなら、なおさらである。そのような困難を感じたものの、近世ドイツ経済史という、自分の専門分野に固執していることにも抵抗があった。経済学部を辞し、教育学部に身を転じた理由の一つがそこにある。その意味で、一般教育部で「経済学」を教えることは、